



真の国際感覚

カリタス女子短期大学 学長
久山宗彦

私をはじめ国際学会に出席したのは、数十年前のオックスフォード大で開催された第9回国際教父学会でしたが、当時はまだ、日本人が国際会議や国際学会に出掛けると、Silenceや当を得ないSmileが目立ち、挙句の果ては会議や学会中にSleepに陥ってしまうと酷評されていましたので、この三つのSだけは何としても避けたいと私は心に誓って出向いたものでした。

今日、国際会議等に出席する比較的若い日本人は、概ね流暢な英語で中味あるSpeechを遣って退けていると仄聞(そくぶん)しておりますが、カリタス女子短期大学卒業生のこのような場での活躍振りもしばしば耳にします。

話は変わりますが、毎年、英語・英語圏文化専攻より送り出す派遣奨学生に対し、出掛けるまでにその国の幅広い知識を身につけるように努めることは勿論、自分や日本人の物の見方、日本文化の特徴についても英語できちんと説明

できることが要求されると助言しております。それというもとのつまりは、現地の方と自分の物の見方の共通点や相違点を認識しつつ、特に後者から出発する対話・相互理解への姿勢を重要視してほしいからなのです。

ところで、学生が英語圏に留学したり、日人がそこでの国際会議等に関わっている時は、「世界の中の日本」という常識的な発想で上記のような対話・相互理解への姿勢がかなり見られるのですが、彼らが帰国するとなると、一変して、日本は世界から分離した「日本と世界」という従来の独語(ひとりごと)・自己理解中心の発想に早く戻ろうとする人が多く出てきます。日本にあっても「世界の中の日本」という発想でいかなければ、日本人の真の国際感覚はなかなか培われていけないと思います。

最後になりましたが、「Kaleidoscope」は創刊以来、はや5年も経過して20号にまで漕ぎ着けました。こういう目出度い節目に当たって、英語・英語圏文化を学ぶ方々が、それとの比較において自らのことばと文化をいかに豊かにしようとしているか、私見ですが、今後そのような記事も大いに期待しております。

“Kaleidoscope”

第20号発行に向けて



英語・
英語圏文化専攻 主任
北川 宣子

2001年4月に“Kaleidoscope”創刊号を発行してからはや5年が経ち、この度20号を発行できることをとても嬉しく思います。この間にもたくさんの方たちがカリタス女子短期大学英語・英語圏文化専攻に入学し、巣立って行き、そしてたくさんの卒業生の方たちが国内だけでなく、海外でも活躍されているという喜ばしいニュースを耳にすることができました。その活躍ぶりの一部はこの専攻新聞で皆さんにもご紹介することができました。そして学生が2年間でどれくらいの英語力が養われたかということも、毎年4月号のTOEIC®コーナーでお伝えすることもできました。

当初は「英語を学ぶ」という共通の目的を持った方々に楽しく読んでいただきたいという思いでスタートした“Kaleidoscope”でしたが、この名称には、英語・英語圏文化専攻を「万華鏡」「Kaleidoscope」にたとえ、その中で在學生や卒業生一人ひとりが色鮮やかに、そして多様に成長していったほしいとの願いがこめられています。そして、私たちの思いはこの5年間でさらに膨らんでいき、卒業生のその著しい成長と飛躍をヒントとして、私たち英語・英語圏文化専攻の役割とは、学生の“Stepping-stone to Success”「成功への橋渡し」になることであると、はっきりと確信することができたのです。今後も専攻の“keywords”とも言える、きめ細かな“care”と、在学中に提供される様々な“chance”を生かし、学生が大きく成長し(“change”),それぞれが“success”へとつなげていってくれることを願い、その様子をこの「万華鏡」に映し出して皆様にお伝えできればと思っております。

第20号

記念号

2006.1.15

第20号記念 カリタス女子短期大学 英語・英語圏文化専攻 卒業生、在学生、教員からのメッセージ



米丸 愛子(日本航空 グランドスタッフ)【2000年度卒業生】

カリタス女子短大時代の私は、都内で一人暮らしをしており、アルバイトと学業の両立に毎日忙しくしていました。田舎から上京し、生活や環境が一変した私にとって、カリタスは少人数制で、先生方は一人ひとりの学生に親切に接してくださいだったので、とても良い環境であったと思います。

卒業後はカリタス女子短大の姉妹校である、アメリカの College of Saint Elizabeth に編入し、二年半かけて卒業しました。短大での単位がそのまま移行できるシステムは、とてもよかったです。留学先での体験は、今の自分に強く影響しています。一言で言うと、「苦しかった」という言葉が最初にできます。バレーボールクラブと学業の両立、文化の違いや、日本の家族や友だちと離れて暮らす生活環境に慣れることにも、初めは時間がかかりました。特に、留学してすぐに米国同時多発テロが起こり、ニューヨークから電車で1時間ほどの所に住んでいた私は、テロや炭素菌などの事件に精神的に悩まされました。苦しく辛いこともたくさんありましたが、その分自分の弱さを知り、家族や友だちなどまわりの人のありがたさを感じ、物事を広い視野で見ることが出来るようになりましたし、異国の文化に触れアメリカ人の友だちとの楽しい思い出もたくさんできました。今思うととても輝いていた2年半だったと思います。

現在は、帰国して成田空港で JAL のグランドスタッフとして働いています。アメリカのデルタ航空担当で、チェックインとゲート業務の一連の流れをしています。6割が外国人のお客様なので、英語を使うことも多く、留学経験が生かせる職場だと思います。

最後にカリタスの皆様へ。社会人になった今でも、いつも感じていることですが、人と人の繋がりはとても大切だと思います。常に目標に向かって努力をしていれば、夢は叶うと思いますし、まわりの人が手を差し伸べてくれると思います。頑張ってください。



笹本 恵里子(ホテルパシフィック東京)【2004年度卒業生】

私は2005年3月にカリタス女子短大を卒業後、東京のホテルにベルガールとして就職しました。初めの頃は、思っていた以上に仕事が厳しく、重い荷物の持ち運びで腰を痛めてしまったりと、辞めたいと思うことが何度もありました。しかしその度、職場の仲間や友人、家族などたくさんの人たちに支えられ、また、社会人としての責任感が、私を「何とか頑張ってみよう。」という気持ちにさせました。今では出来る仕事も増え、「ベル」という仕事に面白みを感じていますし、誇りを持っています。

ホテルというと、華やかなフロントが目立ちますが、実際に直接お客様と接する時間が長いのはベルです。お客様をお部屋までご案内するのが基本的な仕事ですが、お客様の荷物の管理や各種インフォメーション業務、リムジンバスや外国人向けツアーの予約受付業務などです。その中で、来客対応や電話対応をする機会も多く、カリタスで学んだことがとても役

立っています。

私は、英語を生かせる仕事がしたいと思っていましたが、毎日世界各国からのお客様をお迎えしているので、英語を使わない日はありません。よく、英語に敬語はないといいますが、その場に適した言い回しというものがあります。私はホテルに就職してその必要性を感じたので、「接客英語」の本を買い勉強してきました。上司からも、「英語を話せます」という意味の星条旗のバッジを頂きました。このバッジを付けているのはベルの中では私だけなので、プレッシャーにもなりますが、外国人のお客様に頼られる機会も増え、やがての一つになっています。

社会人1年目で私がここまでやってこられたのは、カリタスで培った基礎があったからこそだと実感しています。在学生の皆さん、カリタスでの時間を大切に、思う存分勉強してください。辛く感じることもあるでしょうが、やった分、必ず将来の自分にプラスの力となって返ってきます。頑張ってください



郡司 真澄(横浜銀行)【2003年度卒業生】

カリタス短大の学生の皆さんこんにちは。私が卒業してから早いもので2年が経とうとしています。

私は当時通っていた高校の先生からカリタス女子短期大学を勧められました。もともと英語に興味があり、勉強することも好きだったので、学校案内を見て雰囲気や学校方針を読み、すぐに決めたことを覚えています。

短大では共通科目、選択科目の中から英語に関する授業のほかに日本語や美術、時事に関することなど幅広く学ぶことができました。クラスも自分に合ったレベルの中で学ぶこともできたので、無理なくまた向上心をもって授業に取り組むことができました。その中でも私の一番の思い出はやはりイギリスに短期留学に行ったことです。「留学がしたい」という思いだけでろくに知識、情報もなかった私でしたが、先生方が親身になって学校・ホストファミリー選び、チケットの手配、日程まで組んで下さいました。2ヶ月という短い期間でしたが、本当に良い思い出になりましたし、ますます英語や英語圏の文化に興味を持つきっかけになりました。私が素晴らしい留学が出来たのもカリタスの先生方なくては出来なかったことだと思います。

カリタスの思い出のほかに忘れてはいけないのはやはり素晴らしい友人に恵まれたことです。「オリエンテーション親睦旅行」や「静かに考える会」や「あざみ祭」等は、友だち作りのきっかけにもなり、少人数制ということでもっとも専攻が違ってたくさんの方と出会えました。卒業しそれぞれ社会に出た今でも連絡を取り合える良い仲です。カリタスで出会えた友だちは一生の宝物です。

就職活動の際に、会社選びから面接の練習など親身になって相談、ご指導頂いた方々にも本当に感謝しています。そのおかげもあり私は今大手金融機関の窓口として働くことができました。

ここでは語りきれないくらいカリタス2年間の思い出があります。他の学校に通っていた友だちによく言われたのが「カリタスってアットホームで本当に良い大学だね」という言葉でした。私もカリタスに通って本当に良かったと思っています。学生の皆さん、これから社会に出る人、編入する人それぞれだと思いますが学生でしかできないこと、カリタスでしかできないことを一生懸命やって自信を持って卒業していきましょう。



宮田亜衣子(中央大学 経済学部 公共経済学科 4年生) [2003年度卒業生]

少し英語から離れていた私にとって、カリタス女子短大の授業は高校の授業よりも過酷なものでした。しかし、“Kaleidoscope”に掲載されている、英語に関する様々な記事に興味をわき、いつの間にか楽しく勉強ができるようになっていました。たくさんの情報が詰まっており、毎回楽しみにしていました。初めのうちは、必死に毎日を過ごしていましたが、“Kaleidoscope”のおかげで楽しく2年間を過ごすことができました。またカリタスには、助けてくれる先生方がたくさんおり、苦しいときに頑張れたのも、良い先生方、友人達に恵まれたからだと思っています。

編入先での授業は予想以上に大変なものでした。友人たちと夜遅くまで勉強会をしたり、わかるまで先生にいついたりしたこともありました。苦勞した単位も現在は、卒業論文の単位を残すだけとなり、すべての単位は取り終わりました。就職も決まり、論文の提出日を待つだけです。

卒業してからも温かい言葉をかけてくださり、本当にありがとうございました。



浅野末清(東京女子大学 現代文化学部 言語文化学科3年) [2004年度卒業生]

“Kaleidoscope”第20号発行おめでとうございます。私はカリタスを卒業して約10ヶ月が経ちますが、今でもカリタスでの生活を鮮明に覚えています。その中でも特に、先生方がイギリス留学中、また、帰国後も色々相談に乗ってくださったことがカリタス時代の一番の思い出です。先生方と学生の距離が近いことはカリタスならではであり、このことは学生にとって、とても心強いことであると今改めて感じます。

私は現在、編入先の東京女子大学で勉強しています。やはり、カリタスと比べると大きな大学であり、先生方にアポイントメントを入れるのが難しく、先生方との距離はカリタスのように近くありません。ですから、大学入学当初は研究棟に足を運ぶのに躊躇し、戸惑いました。先生方と話すというのは、問題を解決することという目的のほかにも、様々なことを学ぶことが出来るのです。私がそうであったように、学生たちは授業では得られないものを研究室では得ることができると思います。現在のカリタス生にも、この「先生方との距離が近い」という特色を享受して、とことん先生方と話をしてみることをお勧めします。そして是非、カリタスで多くのことを学んでいってください。



野口麗花(カリタス女子短期大学 英語・英語圏文化専攻 1年)

私はカリタスに入学して、様々な変化がありました。クラスの友人やネイティブの先生方とのコミュニケーションをとるうちに、前よりもかなり行動的になり、授業にも積極的に参加するようになりました。そして私は、会話というコミュニケーションだけではなく、別の視点から英語を学びたいと思い、そこで、小学生の時からやっていた演劇で表現しようと思いました。私はすぐに部員を集め、英語演劇部をつくりました。しかし、英語と日本語の演劇には表現の違いがあり、役者はセリフの暗記や発音という壁も越えなくてはなりません。幸いにも先生方が発音や動きを指導して下さい、みんなと力を合わせておかげで、舞台は大成功でした。私たちは達成感と同時に、英語で表現する楽しさも感じました。さらに良いことに、前よりもボキャブラリーが増え、英語のフレーズがスムーズに出てくるようになりました。自分たちが

楽しみながら英語を学ぶということは予想以上にプラスになります。そして、このような機会を与えて下さった先生方にとっても感謝し、カリタスに入学して良かったと思っています。私は今、とても充実した日々を過ごしています。

浦野 洋司(英語・英語圏文化専攻 教員)

私が“Kaleidoscope”へ最初に投稿したのは、2002年の「狭い門から入りなさい・Go in through the narrow gate!」。早いもので、既に3年以上になります。この3年の間、のぞいた中身は(「万華鏡」の名のごとく)変化に富んだたくさんの模様と色を見せて続けて来ました。「いろはかるた」もありました。更に将来へ、英語圏文化専攻の諸側面、色と模様を見せて成長することを期待します。

伊藤 知子(英語・英語圏文化専攻 教員)

「英米文学の故郷」は2001年4月の創刊号から連載を開始して、2005年10月発行の第19号では第18回となりましたので、“Kaleidoscope”と共に歩んできたと言えるでしょう。作家や作品、地域について記事の形でまとめていく過程では新たな発見があり、私自身も学ぶことが多かったと思います。授業においても、“Kaleidoscope”に書いた記事を資料として活用しています。これからも英米文学の灯をともし続けていきたいと思っています。

パトリシア・保田(英語・英語圏文化専攻 教員)

It is hard to believe that this is Kaleidoscope 20. Time really flies.

I have enjoyed my section of the bulletin very much as it has enabled me to keep in touch with many of our graduates overseas. It is good to catch up on all their news.

I hope, in the future, more students will send us articles on what they have achieved abroad.

北脇実千代(英語・英語圏文化専攻 教員)

私がカリタス女子短期大学に着任したのは、“Kaleidoscope”発行3年目の春でした。第9号からの参加となり、年に3回「太平洋を越えた人と文化」を担当しています。このコーナーは、私自身が、太平洋を越えてアメリカへと渡った日本人移民に興味があることから始めたものでした。毎回その時々話題となった事柄と関連したテーマを選ぶようにしています。年度の最後には「TOEIC®コーナー」も担当していますが、こちらは学生のTOEIC®の伸長度を改めて確認できる意義深いものとなっています。

前田隆子(英語・英語圏文化専攻 教員)

私は主に企画とCool Web Siteを担当しています。「継続は力なり」といいますが、20号まで続いた“Kaleidoscope”は、まさに英語学習の動機付けを高める「力」となっていると思います。しかし少々マンネリ化してきた部分もありますので、今後は新しい企画に取り組みたいと思います。

先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのか、学生によるインタビュー形式でお届けします。第 20 回目のゲストは、仏語・仏語圏文化専攻の北垣潔先生です。インタビュアーは本専攻 2 年生の熱海有紀さんです。



北垣 潔先生

Q: 大学では何を専攻なさっていましたか？

A: フランス文学です。卒業論文はスタンダールの『パルムの僧院』の時間の問題について書きました。

Q: フランス文学及びフランス語に興味を持つきっかけとなったものは何でしたか？

A: 中学、高校の頃、映画を見たり、日本文学の中にフランス語やフランスの詩人の名前を見つけるようになり、フランスに興味を持ち始めました。またフランス語の響きの美しさに惹かれました。

Q: 学生時代の最も印象深い出来事は何ですか？

A: 1年間のパリでの留学生活です。パリでは語学の勉強はもちろんのこと、文化にも触れたいと思いい、よく劇場に出かけてバレエを鑑賞しました。バレエはローラン・プティの振り付けのものが好きです。パリでは散歩をするだけでも、よい勉強になりました。

Q: 文学を学ぶ上で大切なことは何ですか？

A: まず有名な本を乱読し、知識をふやすことです。次にポイントがつかめるようになってきたら、自分の考えと照らし合わせながら読んでみてください。そうするうちに様々な人の考え方、見方との比較から新しい思考方法が芽生えるはずですよ。どんな本にも先入観を持たずに、まず読んでみるのが大切です。

Q: 先生のご趣味は？

A: 先程述べたバレエ鑑賞や、映画鑑賞です。音楽はジャンルを問わず何でも聴きますが、最近では MAROON 5 が気に入っています。Yellow Magic Orchestra(坂本龍一を中心としたバンド)が私の音楽の原点でしょうか。

Q: 現在取り組んでいることは何ですか？

A: 18世紀フランス革命の頃のサロン文化に始まる文学について研究しています。また、ブローデルという20世紀の歴史学者の歴史集成の翻訳も行っています。

Q: 最後の英語・英語圏文化専攻の学生に一言お願いします。

A: 英語は将来も学び続けていかなければならないものですが、英語以外の何か他のものにも触れ、幅を広げていって下さい。何事にも偏見を持たず、様々なことにチャレンジし、独自の世界を見つけてみて下さい。

Kaleidoscope 第 20 号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2006 年 1 月 15 日発行

発行責任者： 北川宣子

編集協力：東京工科大学

コンピュータサイエンス学部 塙 竜太郎

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>